狭心症の再発が疑われていたが、明らかな虚血性変化がなく安心感につながった例

ゆみのハートクリニック　田中 宏和 院長

症 例

症　例：54歳、男性
主　訴：胸部の違和感
既往歴：狭心症
現病歴：家族性高コレステロール血症、睡眠時無呼吸症候群、ウィリス動脈輪閉塞症、糖尿病

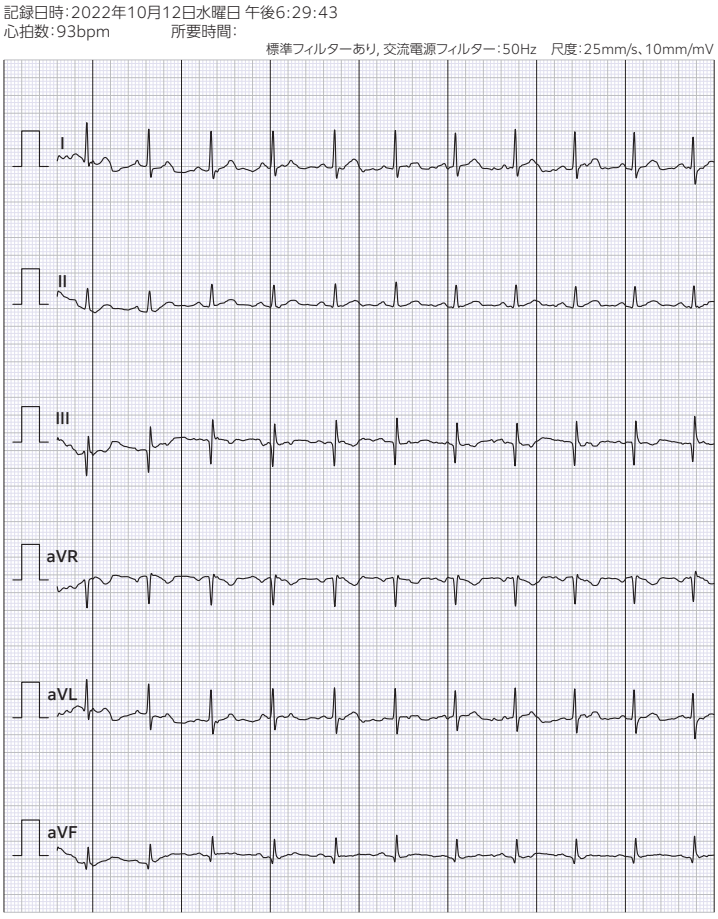
携帯型心電計の使用

患者さんは睡眠時無呼吸症候群で当院に通院中であった。2013年以降、狭心症でかかりつけ医のいる他院で計8回のPCIを受け、フォローされていた。最終PCIから半年後、胸部の違和感を自覚し、再狭窄が疑われた。当院でもST変化などを確認するために、オムロンヘルスケア社製携帯型心電計の使用を提案した。

導入時の受け入れや使用方法の理解は良好であった。使い慣れるまでは自覚症状がない時でも練習として使うよう伝えた。いざ胸部症状が出現した時に焦らず正確に使ってもらうためである。使い慣れてからは自覚症状のある時のみに使うよう伝えた。

2022年9月27日から10月24日までの28日間で14回記録され、解析結果の内訳は、「正常な洞調律」が13回、「頻脈」が1回であった。再診時にST変化を確認したが明らかな虚血性変化は認められず狭心症の再発は否定的であり、不安や肋間神経痛といった非心臓由来の胸部症状であったと推測した。

過去に狭心症再発とPCIを何度も経験していたことで、胸部症状が出現してからはとくに不安が強かった。今回、携帯型心電計による有症状時の心電図記録で再発を否定できたことで、不安が軽減された。



解析結果：正常な洞調律

考 察

本携帯型心電計は6誘導の記録が可能なため、冠攣縮性狭心症をはじめとした心筋虚血に伴うST変化を評価するうえで、1誘導のみの評価に比べて有用であると考えられる。また、ホルター心電図や埋め込み型心電計と違い、有症状時に患者さん自身で波形を記録できる本携帯型心電計は、すぐに結果を知ることもできるため、安心感につながるといった点でも有用であると思われた。